

幕末における攘夷論の諸相(二)

内藤 俊彦

三

竹越與三郎は『新日本史』において、幕府累年の財政窮乏と武備の弛緩を指摘して、続けて幕府の開国政策を次の様に論評している。曰く、「されば此時徳川氏の幕府は、算盤の上に於て早く已に倒れたるも、僅かに事なきを以て命脈を維持したるに過ぎず。況んや之を以て外に向て戦端を開かんなどは思もよらぬ事なりしなり。故に幕府は決して純粹の開国党にあらず、その精神は尚ほ外人を夷狄視するものにして、僅かに内外の勢に迫られて、外人を容れたる退守的開国党に過ぎざるなり」と。⁽¹⁾幕府の開国姿勢に対する福沢諭吉の批判はもつと痛烈である。曰く、「当時日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷藩で徳川幕府ばかりが開国論のやうに見えもすれば聞えもするやうでありますけれども、正味の精神を吟味すれば天下随一の攘夷藩、西洋嫌ひは徳川である」と云て間違ひはあるまい。或は後年に至て大老井伊掃部頭は開国論を唱へた人であるとか開国主義であったとか云ふやうな事を、世間で吹聴する人もあれば、書に著はした者もあるが、開国主義なんて大嘘だいごの皮かわ、何が開国論なものか、存じ

掛けもしない話だ。(中略)井伊大老は真実間違ひもない徳川家の譜代、豪勇無二の忠臣ではあるが、開鎖の議論に至っては、真闇(まぐら)な攘夷家と云ふより外に評論はない。唯其徳川が開国であると云ふのは、外国交際の衝に當って居るから余儀なく洩々開国論に従て居た丈けの話で、一幕捲(まきまき)って正味の楽屋(がく)を見たらば大変な攘夷藩だ。こんな政府に私が同情を表することが出来ない⁽²⁾と云ふのも無理はなからう⁽²⁾と。

幕末に幕府外交の第一線を担当した開明的官僚の対外認識と外交政策について直ちに竹越・福沢の論評が妥当するとは考えられないし、両者もそのことについて論評してゐるのではないであらう。何分にも幕府は龐大な官僚群の寄り合い世帯であり、一部の積極的な開国政策推進派の官僚を除いた、大方の幕府官僚に支配的な心情は、竹越・福沢の証言の通りであつたと考えてよいであらう。ここでは、開国に対して積極的な見識も展望も持たないままに、列強の軍事的圧力に度を失つて専ら対外的危機を弥縫的に回避することのみ関心が限定された開国政策が論難(ろんなん)されていると考えられる。

右の様な対外態度とは稍趣を異にするとはいへ、会沢正志齋の『時務策』は竹越の所謂「退守の開国」論への傾斜を示していると考えられる。かつて文政八年の『新論』——幕末尊攘論の有力な思想的根拠がこれであつたことは周知の通りである——において排外・攘夷を鼓吹した会沢は、水戸藩内が所謂「戊午の密勅」返納問題をめぐる対立で危機の様相を示している文久二年に、返納派の立場から、これに鋭く対立する尊攘激派を論駁して『時務策』を著わしたが、この冒頭で会沢は、「国家敵制アリテ外国ノ往来ヲ拒絶シ給フハ、守国ノ要務ナルコト勿論ナレドモ、今日ニ至テハ、マタ古今時勢ノ変ヲ達観セザルコトヲ得ザルモノアリ。(中略)天下ヲ治ルニハ時ヲ知ルヲ要ス⁽³⁾」と述べて、以下「時」の変転による現在の攘夷の不可能を論ずる。議論は当然戦術・戦略上の観点が主となる。比較的短い論文であるがその主な論点を紹介する。まず彼我の兵器の優劣の比較。「血氣ノ小壯ハ、大敵ヲ引

受ナバ打破テ神州ノ武勇ヲ万国ニ輝サン」などと言うが、「今外国ノ火器、近時ニ至テ益々巧ヲ極タレバ、短兵長兵ヲ論ゼズ、勝敗ハ兵ヲ用ルモノノ巧拙ニヨルベシ。是武勇アリトイヘドモ必勝ヲ期シ難キ一ツナリ」。さてしからば「武勇」ハ兵士の質を彼我比較すればどうか。「神州ノ武勇ハ勿論ナレドモ、太平久ク、勇士モ往昔ヨリハ少ク、身体軟弱ニシテ肥甘軽煖ニ習ヒ、寒暑風雨ニ堪ヘズ、(中略)将帥タルモノ多クハ世禄ノ丸袴子弟ニシテ兵ヲ知ラズ、(中略)外国ハ鄙陋ノ蛮夷ナリトイヘドモ、百戦ノ実地ニ試ミ、用兵ノ術ニ鍛練シ、火器精巧ニシテ数百歩ノ外ニ折衝ス。(中略)必勝ヲ期シ難キノ二ナリ」。次に藩士・処士層が攘夷運動ニ奔ることを批判する。曰く、「国ノ存亡ヲ謀ルハ上ニ在ル人ノ任ナリ。下トシテハ、事ノ是非ヲバ論ズルトモ、謀猷ヲ己ガママニ決スルコトアタハズ。(中略)小壮ノ論ハ、義ニ当テハ国家ノ存亡ハ論ズルニ足ラズ、唯其義ヲ行フベシナドム唱ルモノモアランカ、天下ハ天下ノ天下ニシテ一人ノ天下ニアラズ、然ルニ臣下ノ身トシテ、天下ヲ一己ノ私物ノ如ク軽々シク是ヲ一擲ニ抛ントスルハ、臣子ノ心ト云ベカラズ」と。政治的組織(とりわけここでは藩)の内部における政治的決定権と命令服従における上下秩序の指摘並に政治的決断が準拠すべき格率は倫理的価値「義」ではなく政治的共同体それ自体の存立「国家ノ存亡」であるとの主張がここでなされている。次に開国政策の歴史的正当化がなされる。曰く、「外国ヲ一切ニ拒絶トイフコト、寛永ノ良法トイヘドモ、其本ハ天朝ノ制ニモ非ズ、又東照宮ノ法ニモ非ズ、寛永中ニ時宜ヲ謀テ設給ヒシ法ナレバ、後世マデ動スベカラザル大法トハイヘドモ、宇内ノ大勢一変シタル上ハ、已ムコトヲ得ズシテ時ニ因テ弛張アランコト、一概ニ非ナリトモ云難シ」と。そして論文の末尾に曰く、「右ニ論ズル所モ、必シモ外国ヲ拒絶スベカラズトイフニアラズ。万国ノ形勢ヲ審察シテ、拒絶シテ宜シキニ当ル時アラズバ拒絶スベシ。必シモ戦フベカラズトイフニアラズ。孫子始計ノ如ク、廟算シテ彼ヲ知り、我ニ算ヲ得ルコト多クバ戦フベシ。算ナクシテ妄ニ戦フベカラズ。(中略)輕易無謀ニシテ暴虎馮河センハ、実ニ危キ事ニシテ、

天下ノ大事ヲ敗ルニ至ルベシ」と。⁽³⁾

ここには、かつて「血氣ノ小壯」に尊攘論を鼓舞し、今己が播いた種を自から刈り取ることに苦渋する会沢が居る。がしかし、会沢の『時務策』における説得のロジックは弱々しく、就中末尾の文章に見る様に不徹底である。勿論、戦略・戦術的観点からする言説は、それがなによりもまず現実⁴に刻々に生起する多様な諸条件に制約されているという意味で、理論的な明晰さ・論理的一貫性をそこに期待することはできないであろう。がしかしまたそれがある特定の目的に向けられているという観点からするならば、戦略・戦術上の言説は、目的と手段とに関する理論的な明晰さと論理的一貫性を強く要求されるものであるといえる。後者の観点に立つならば、日本の外交政策の基調を開・鎖いづれに置くかという目的設定において、『時務策』の会沢の立場は明確性を欠いている。従って必然的に手段⁵と当面の列強との外交関係の処理の仕方について、会沢は明確に一つの方針を選択する——換言すれば、他を断念することであるが——に至っていない様に思われる。ここでは、会沢は、『新論』の排外・攘夷と現実によって不可避免的に強いられている（と会沢が考えている）不本意な開国との間を揺れ動いている。『時務策』末尾の文章の歯切れの悪さはここに由来すると思われる。攘夷と開国とについて戦略・戦術的にそれなりに明解な関係づけをなしている「攘夷開国」派に、この時期の会沢の言動が不審に映ったのも当然であろう。久坂玄瑞は文久元年の書簡で「豊田会沢はおかしな議論を被⁶吐よし、嘆息失望々々」と書いている。⁽⁴⁾この久坂が同じ時期に、開国論者を論難しながら、積極的な開国論者の一面を持っている佐久間象山——彼はその積極的な開国論を忌まれて元治元年七月京都で攘夷派に暗殺されるのであるが——に対して、「先日象山師へ参候処、矢張航海論にて見⁷物均⁸之謂⁹之物、是などの説にて候、併此師は大人物にて、我々の企る処に非ず、堀田上京の時にも力を尽され候、素より戦を怯れ航海を唱ふる者と同日の論に非ず」と、一定の理解を示しているのは、久坂の「攘夷開国」論のあ

り様を知る上でも、また会沢と象山の「開国論」の相違を知る上でも、多少参考となるエピソードである。要之、『時務策』における会沢の開国論は、彼我の国力の圧倒的な隔絶という現実の前に余儀なく屈服せしめられた開国であつて、精神的には、冒頭で引いた竹越・福沢が論評する幕府の開国態度と軌を一にするものであるとしてよいであらう。

さてしかし、幕府の開国政策の一面に、竹越・福沢の前引の様な非難を浴びなければならぬ部分があつたとしても、幕府が公式にあるいは非公式に自己の開国政策を国内的に説明する場合に屢々使用した論法は次の様なものであつた。すなわち、彼我の国力の現状では攘夷は不可能である、それ故開国して国力を増強した上で、攘夷を行するのである、と。熱狂的な攘夷論者である徳川斉昭に、勘定奉行川路聖謨・留守居筒井政憲が説いた「ぶらかし」策なるものは、その様な論法を用いた事例であらう。兩名曰く、「つまる所は公辺初諸大名備向手薄く且二百余年の太平にて武衰へ、アメリカは万国に勝れたる強国にて蘭人抔も恐れ居候程の義、なまじる打払候て負候へば御国体を汚し不容易候へば蘭人へ被遣候品を半分わけて交易御済せ可然哉云々。(中略)御備さへ御手厚く候へば心丈夫に候へ共如何にも御手薄故、俗に申ぶらかすと云如く、五年も十年も願書を済せるともなく断るともなくいたし、其中此方御手当此度こそ嚴重に致し其上にて御断りに相成可然」と。勿論この様な説明が真に相手方を納得させることができたかとなると疑問である。現に斉昭は、この説明に対して「左様存候通り五年も十年もぶらかす事無相違出来候はば御内地の騒ぎもなく人へも疵付不申其内御手当も嚴重に相成候はば其儀は可然、乍去拙者は左様ぶらかされ候処何共安心不致」と答えている。しかし幕府はこの論法を屢々使用する。例えば、和宮降嫁を実現すべく、孝明天皇の「蛮夷拒絶」の旨を受けて万延元年七月に幕府が朝廷に提出した「老中奉答書」は、即時攘夷が不可能な理由を繰々述べた後に、「実に只今軍艦銃砲製造真最中にて、決して懈怠致し居候儀にては更に無之、追々

衆議を尽し連三計策^{のくさ}の処、当節より七八年乃至十ヶ年を相立候内、是非々々以三応接引展候乎、又は振三干戈^{のくさ}二加三征討^{のくさ}「候乎」、いづれにしる「叡慮」にかなった所置をすることを確約している。

幕府が多用したこの論法は、逆に幕府に対して攘夷決行を迫る口実を攘夷派に与え、幕府を外交上のみならず国内政治上も窮地に追い込む結果になったのである。しかしとはいふものの、右の論法は、望ましいものではないが止むを得ない選択としての開国を合理化するために広く用いられたものである。開国―国力増強―しかる後攘夷という論法を、仮にここで便宜的に「開国攘夷」論と呼ぶならば、この「開国攘夷」論は、それとしてこの時期の歴史の課題をそれなりに解決しようとするものであった。次に佐久間象山と橋本左内の「開国攘夷」論を見よう。

竹越は佐久間象山を「攘夷の開国党の首領」と呼び、その思想を「深く天下の形勢を慨し、到底、今日の国力を以ては、外夷と抗立する能はざれば、先づ一たび外国文明に降服し、其利器軍制を習ひ得て後、攘夷開国ともに為すべしとなせし」ものと要約している。

醇乎たる朱子学の徒をもって自から任じている象山は、その對外論についてみればはじめは熱心な攘夷論者であった。それ故にまた阿片戦争における満清敗北の報が彼に与えた衝激もひとしお深刻なものであった。この衝激から数年経た時、阿片戦争での満清敗北の原因を論じて、象山は次の様に述べている。曰く、「惟只顧己の国のみよき事に心得外国といへばひたものに輕視し候て夷狄蛮貊と賤しめ彼（西洋諸国）の實事に熟練し国利をも興し兵力をも盛にし火技に妙に航海に巧なる事遙に自国の上に出でたるを知らず居候故に一旦イギリスと乱を構ふるに及で大敗を引出し恥辱を全世界に貽し大に古昔聖賢の体面を破り候事に御座候」と。勿論この批判はひとり満清にのみ向けられたものではない。むしろ象山の関心は吾国の治者の警醒にある。ここではすでに独善的な排外・攘夷論は退けられている。すでに天保一三年に、阿片戦争の情報に接して藩主に提出した建白書に、攘夷論の立場に立つて

西洋文明導入による軍備の増強を唱えていた象山は、文久二年には、「外藩御取扱は即ち賓礼に属し候義、賓礼は即ち五礼の一に候へば厚くせさせられずばあるべからずと奉存候。厚くと申義無下に彼を崇め御国体を屈し候義には無御座、至当の礼儀を以て御手薄の義無御座候様にと申迄に御座候」と、外交関係を『周礼』にいわゆる「賓礼」をもって処理すべき関係と捉えるに至る。つまり「以賓礼親邦国」(『周礼』・「春官」)というわけである。

さて、外国交際を「賓礼」をもってすべしという提言は、「学行技巧制度文物此方(吾国)より備はり候と見え候有力の大国」に対して「東西洋の大国を斥して夷狄と御賤み」するのは、「此国の御無礼に当り」かつ「大邦の怒を起し候筋御損なる御事」であるから、かかる呼称をやめるべきであるとすの提言と結びつけられて述べられているのであるが、では鎖国・攘夷から開国・「賓礼」への思想の転回に当って象山の用いたロジックはいかなるものであったのか。この点についてはすでに先学が余すところなく明らかにしていると思われる⁽¹²⁾。以下それらの成果を参照しつつ概説しておく。

象山の思想において終始一貫して顕著に認められる特徴は、未知のものに対する知的好奇心とこの未知のものを成立させている原理的なるものに対する探求心であるといえる。この特徴が自然科学の領域において最も顕著に表われ、とりわけ西洋自然科学と技術との基礎にあるものとして「詳証術」(数学)を発見するに至ることはよく知られている。「省儉録」に云う、「詳証術は万学の基本なり」と⁽¹³⁾。

象山のこの知的関心が、緊迫した国際関係の領域に向けられる場合には、欧米列強に関する広範な知識・情報の収集の提言となり、また国際関係を律する原理的なるものとしての「力」の認識に到達することになる。例えば云う、「力を同じくすれば徳を度り、徳を同じくすれば義を量る。文王之美を称すと雖も、亦大国その力を畏れ、小国その徳に懐くと云に過ぎず。その力なくして能くその国を保つ者、古より今に至るまで、吾未だこれ見ざるな

り。誰か王者は力を尚ばずと謂わんや⁽¹⁴⁾と。あるいは云う、「擾乱の世と成候時はいつの代も同様暗は明に并せられ弱は強に吞れ申候此時に至り候ては他を并吞候程の力無之候ては他の并吞を免れず候⁽¹⁵⁾」と。ここでは、国際政治は赤裸々な「力」の支配する領域として把握られ、孔子が聖人として崇める周の文王の統治についての論評に見られる様に、徳のカリスマによる支配を理想とする儒教的な政治観に対するシニカルなアンチ・テーゼさえ感じさせられる。象山における「力」の問題については既に植手通有の詳細に論ずるところである⁽¹⁶⁾。

知識・情報収集の提言は、とりわけこの時代に人々が好んで援用した、「孫子」の「知彼知己、百戦不殆⁽¹⁷⁾」を有力な根拠としてなされ、象山自身これを「夷俗を駆し候には夷情を知り候より先なるはな⁽¹⁷⁾」しと表現している。そして、象山が嘉永二年以後折に触れて松代藩と幕府とに執拗に嘆願して遂に果せなかつた、和蘭辞書「ズーフ・ハルマ」の増訂版開板の主要な動機の一つはここにあるし、また吉田松陰に所謂「下田踏海策」を慫慂した動機もここにあった⁽¹⁸⁾。前者に関して、象山は辞書板行の意義を「当今外寇に備へ候の急務は彼を知るより先なるはなく、彼を知るの方法は彼の技術を尽すより要なるはなく、彼の技術を尽し候には天下に其学の階梯なる詞書を梓行するより便なるはなし」と述べて、更に続けて、「期する所は五大洲の學術を兼備し五大洲の所長を集め、本邦をして永く全世界独立の国とならしむる基礎を世に弘めむと申所」が辞書板行の窮極の目標なのであるとしている⁽¹⁹⁾。

ここには、象山の思考方法に顕著な特徴が二つ表われている様に思われる。それは先程述べた彼の知的関心のあり方とある意味では重複するのであるが、一つは、情報をできるだけ広範囲に収集すること（それはいうまでもなく未知のものに対する旺盛な知的好奇心の延長上のものである）とその情報をできるだけ多くの人々に共有させようとする態度であり、二つは、「本邦をして永く全世界独立の国となさしめる」という遠大な目的を辞書板行というある意味では迂遠とさえいえる基礎的な事柄から着手しようとする態度である。これは先に述べた、原理的なも

の対する象山の探求心の別の表現であることはいうまでもない。更にまた辞書板行と「全世界独立の国」との関連づけは、彼の人口に膾炙している、「予、年二十以後、すなはち匹夫も一国に繋ることあるを知る。三十以後、すなはち天下に繋ることあるを知る。四十以後、すなはち五世界に繋ることあるを知る」という、彼の世界認識の拡大とかかる拡大された世界における自己(「匹夫」)の定位のプロセスと内的に呼応するものであるといえる。この両者は共に、全体と個との関連性的な確な認識と、個から全体へ到達する、あるいは逆に全体の中に個を明確に定位する、強靱な構想力への発展を予知せしめることにおいて、この時代に傑出しているといふべきであろう。

さて、「匹夫」・「一国」・「天下」・「五世界」が象山の認識の世界において、一つの統一的全体像の中にそれぞれの位置をしめるものとして把握されるならば、幕末日本の鎖国から開国への外交関係の転換も、方法的に明確に自覚化された過程として把握されることになるであろう。象山の場合にはこの転換のロジックはいかに展開されているか。

象山においては、幕府の「祖法」である鎖国政策が、ある種の攘夷論者に見られる伝統主義的な神聖化・不可変性の神話から解放されて、歴史の中へ、具体的な状況に制約された合目的な政策の次元へと引き戻されることになる。例えば、西洋型艦船の製造禁止令の廃止を主張して象山は云う。「如何程重き御規定御座候とも天下の安危には難替義と奉存候。畢竟御先代様にて右等重き御規定を被為立候も天下後世の義を厚く被思召候ての御事に候へば、(中略)天下の為に立てさせられ候御法を天下の為に改めさせられ候に何の御憚か御座候べき。平常の事は平常の法に従ひ非常の際には非常の制を用ひ候事と漢古今の通義と奉存候」と。⁽²¹⁾

かくして鎖国・攘夷政策は、現在の日本を取りまく国際情勢の許でその目的合理性が検討の俎上にのぼせられることになる。例えばこうである。「天下城制今時軍術の法に叶はず外寇の防禦は総て脈絡の貫通を缺き、(割注略)

人に譬へ候へば全く裸体空手のありさまに御座候。(中略)如此当今の御様子にては和蘭の一小国と御抗拒御座候ても甚だ無覚束奉存候。(中略)況や外四大国を併せて一斉に御抗拒御見せ付け御座候はむ策略いづれよりして可立申や。(中略)抑五世界の學術智巧次第に開け各国の兵力所作此形勢に相成候も実上天運のしからしむる所、皇国独り此天運を奈何せらるべき。且御鎖国の御手段も充分の御国力と御伎倆無御座候ては不被為叶、又學術智巧は互に切磋して相長じ候もの故に、始終御鎖国にては御国力御伎倆共竟に外国に劣らせられ終に御鎖国も遂げさせられざるに至り可申⁽²²⁾。ここで指摘されているのは、開国して「御国力御伎倆」を増強しなければ鎖国さえも維持できないという、逆説的な現実である。攘夷論の立場に抛りながら、かかる逆説を逆説のままに終らせないためには、幕末日本が置かれている歴史的現実の中で攘夷の意味の読み換えが必要となるであろう。この読み換えがいかなる形でなされたのかについては、後に検討することとして、象山について云えば、この逆説は「夷を以て夷を制す」という中国古典の語句⁽²³⁾が、「夷の術を以て夷を防ぐ」と読み換えられて弥縫されていることはよく知られている。象山は云う。「ロシアの先主ペートルが和蘭人を師として遂に和蘭に劣らず、北アメリカ人英吉利を師として終に英吉利に勝ち候類は、御承知無之候義や。兎に角愚意には夷の術を以て夷を防ぐより外無之と存候。彼れに大艦あらば我も亦た大艦を作るべし、彼に巨砲あらば我も亦巨砲を造るべし⁽²⁴⁾」と。かくして象山において西欧技術の摂取が積極的に推進されることになるのは、既にいくつか引いた彼の文章に明瞭に述べられている通りである。

人口に膾炙する「東洋道德、西洋芸術」⁽²⁵⁾の語は、象山のこの様な意味での対外態度と開国論を定式化するテーゼであった。がしかしまた、このテーゼは必ずしも、西洋文明の摂取を物質文明ないしは科学技術の領域のみに限定しようとするものではなかった。植手が犀利に論じている様に、「西洋芸術」西洋近代自然科学の成果を高く評価しながらも、特殊西洋近代の意味における社会秩序と自然秩序の分裂を意識しなかった象山は、朱子学的意味におけ

る格物窮理による「道」の探究の中に西洋自然科学的探究を何の矛盾もなく包摂せしめていたといえる。従って象山にとっては「西洋芸術」の究明は、そのまま「東洋道徳」「道」の究明なのであった。このことはなによりも右の語句を含む一節が、「君子有五楽⁽²⁶⁾」にはじまり、「西人理窟を啓くの後⁽²⁷⁾に生れ、古の聖賢のいまだ嘗て識らざる⁽²⁸⁾ところの理を知るは、四の楽なり。東洋道徳、西洋芸術、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもって民物を沢し、国恩に報ゆるは、五の楽なり」と結ばれている処から明らかであろう。かくてここに「本邦をして永く全世界独立の国」となすという目的のもとに彼の蘭学修業・大小砲鑄造等々の西洋技術の摂取の努力が根拠づけられることになる。

こうして、象山の「資礼」に基く外国交際論とこれを基礎づけている彼の西洋認識とを見れば、彼の開国論は、攘夷論の贅りのない積極的な開国論である様に見える。だがしかし、文久二年の建白書に鎖国・攘夷の不可能を説いたあとで象山が、「夫よりは外藩と礼義を以て御交通、其間に公武御合体被為在御共々御励精被遊、(中略)万国の長ずる筋を被為集、外国にも追々日本領をも被為開、御国力の御強盛も万国の上に出で、銃砲の御修繕弾薬の御術業も万国の上に出で、軍艦の数も万国の上に出で、将材異能の士の衆多なるも万国の上に出で、兵卒の錬熟も万国の上に出で、城制の堅固なることも万国の上に出で候様被為至候はば、兼ては關關の禍心を致包蔵候国々も自然と奉憚畏、御抗拒を待たず跡を絶ち可申、又御徳化を奉慕候上よりは貢献を修めて奉臣服候も可有御座候」と述べられているのを見れば、象山の開国論にも依然として根強く攘夷論が通底しているのを知ることができよう。この点で、象山を「攘夷的開国党」と規定した竹越三又は正鵠を射ていたと言うべきである。

先学の研究を祖述しつつ佐久間象山の開国論とこれに関連する若干の問題を整理して来たのであるが、次にこの時代のもう一人の開国論者橋本左内の対外認識とそれをめぐるいくつかの問題を検討しよう。

橋本左内は天保五（一八三四）年生れであり、福沢諭吉（天保五（一八三五）年生）と陰曆で同年生れであり、佐久間象山（文化八（一八一）年生）・横井小楠（文化六（一八〇九）年生）・藤田東湖（文化三（一八〇六）年生）等からほぼ一世代後れていることになる。

左内は福井藩の藩医の家に生れ、一六才で大阪の緒方洪庵の適々齋塾に入門し蘭方医学を修めた。安政二年藩主の認めるところとなって、慶永の柩機に参画し、とりわけ將軍継嗣問題にかかわって朝廷工作に従うが、安政六年大獄に連座して刑死する。その晩年には英語・独語をも修めていたといわれ、⁽²⁸⁾ まずは当代第一級の西洋事情通であったといえよう。

左内が日魯同盟論を展開しているよく知られた書簡がある。これによって、左内が当時の国際情勢をいかに把握し、それに吾が国がいかに対処しなければならぬと考えていたかを見よう。多少長くなるが次にこの書簡の右の問題にかかわる部分を引用しよう。

方今之勢は、行々は五大洲一図ニ同盟国ニ相成、盟主相立候て四方之干戈相休可申相運候半と奉存候。右盟主は先英・魯之内ニ可有之候。英は憚悍貪欲、魯は沈鷲嚴整、何れ後ニは魯へ人望可帰奉存候。諸日本は迎も独立難相叶候。独立ニ致候には、山丹・滿洲之辺・朝鮮国を併せ、且亞墨利加洲或は印度地内ニ領を不持しては、迎も望之如ならず候。此は当今は甚六ヶ敷候。其訳は、印度は西洋ニ被領、山丹辺は魯國にて手を附掛居候。其上今は力不足、迎も西洋諸国之兵ニ敵対して、比年連戦は無覚束候間、劫て今之内ニ同盟国ニ相成可然候。然処亞国其外諸国は交置候も不苦候へ共、英・魯は両雄不並立ニ国故、甚以扱兼申候。其意は既に「ハルレス」口上ニも歴然、其上近来争鬪之迹にて明白ニ御座候。依之、後日英魯ヲ伐先手を頼候敷、又は蝦夷・箱館借兵候旨可願候。其時断然英を断候敷、又は從候敷。定策可有之事、小拙は是非魯に從ひ度奉存候。其訳は魯は信あり、隣境なり、且魯ト我トは唇齒之國、我魯に從候はは、魯我ヲ徳とすべく候。左スレバ英怒

り可_レ伐_レ我、此我願なり。我孤立ニテ西洋同盟之諸国ニ敵対は難_レ致、魯之後援有れば、假令敗ル_レも皆滅ニ不_レ至は了然に候。然れば此一戦我弱を強ニ転し、危を安ニ変候大機関ニ御座候て、此_レ我日本も真之強国ニ可_レ相成_レ候。其上其戦争迄ニは、是非魯国並亜国_レ人を倩ひて、我国之大改革始、水軍陸戦共精勵可_レ為_レ致_レ奉_レ存候。儲右様魯之親昵を得候ニは、所謂難_レ報之恩無_レ之しては不_レ相濟_レ候。魯之我_レの使節を以て和親を乞_レ候積、其段ニは種々心算有_レ之候得共、筆ニては難_レ述候。儲魯ニ国を託し候迄ニ、外_レの擾乱被_レ致候ては不_レ相成_レ候故、其迄は何分亜墨利加を頼付、英夷之跋扈強梁等は成_レ丈拒貫_レ候事。依_レ之交易ニストル指置之ニケ条相許、其中交易は矢張官府交易ニ致度候間、勝手交易は相断申度候事。阿片並借地之事は断り、港は堺・神奈川・箱館・長崎之四個所位ニ極置申度事。何分亜を一ケ之東藩ト見、西洋を我所屬と思ひ、魯を兄弟唇齒となし、近国を掠略する事、緊要第一と奉_レ存候⁽²⁹⁾。

見られる様にここでは、第一に、国際政治が英・魯を両軸とする、軍事力に基づいた「力」による対立の關係として捉えられ、その様な国際政治状況の中での日本の外交政策が検討されている。第二に、直接には国際關係を「力」による対立として捉えること——これは先述の佐久間象山と共通する——の帰結ともいえると考えられるが、彼の開国論は「攻撃的」(「近国を掠略する事」とでも呼ぶべき性格を持っている。そしてまた開国論にまつわるこの「攻撃性」は、左内に限らず、この時代の開国論の多くに多かれ少なかれまつわりついているものであるといえる。例えば、先述の象山にもそれはあった。第三に、日魯同盟に反撥した英国の日本に対する軍事侵略(左内は、英魯いずれか一方に対する同盟關係の形成は、不可避的に他方の軍事的な反撥を引き起すと考えている)によって生ずる対外的危機を楯杆として、国内における政治上軍事上の变革を断行しようと考えている。この点では、「攘夷開国」派が攘夷||對外戦争を楯杆として国内の变革を実現しようとしているのと発想の基盤を同じくするのであると考えてよい。

左内が国内改革を差し当りどの様に構想しているかは、先の引用の後に続けて述べられている。「偕右様大变革相始候ニ就ては、内地之御処置、此迄之旧套ニては不_レ相濟_一、第一建儲、第二我公・水老公・薩公位を国内事務宰相の専權にして、肥前公を外国事務宰相の専權にし、夫三川路・永井・岩瀬位を指添、其外天下有名達識之士を、御儒者と申名目ニて、陪臣処士ニ不_レ拘撰挙致し、此も右専權之宰相ニ派別に致し附置、尾張・因州を京師之守護ニ、其指添ニ彦根・戸田位、蝦夷へは伊達遠州・土州侯位相遣し、其外小名有志之向を挙用候はは、今之勢ニても随分一芝居出来候事歟ト奉_レ存候。其上魯西亞・亜墨利加_ノ諸芸術之師範役五十人計借受、諸国ニ學術稽古所相起、物産之道を手広に始め、内地之乞兒・雲介之類ニ頭を立、相応之賄遣し、山海之營為_レ致、往來は重に海路_ノ致し候はは、蝦夷も忽開墾可_レ相成_一、航海術も直ニ可_レ熟奉_レ存候。」⁽²⁹⁾左内のこの構想には要点が四つ含まれている。

一つは幕府の行政機構を改革して、国内事務・外国事務について「専權」の「宰相」を設けること。ここには「外国」問題の発生が直ちに「国内」問題呼び起したという事情が端的に反映している。すなわちこのことは、国内統治の大きな部分が諸大名の個別領有權に基づく統治に委ねられ、中央權力として全国を統一的に統治するという意味での「国内」問題の必要をそれ程強く意識することのなかつた幕府の旧來の統治權力が、対外国關係の發生によつて變質を強いられ、新しい統治領域としての「国内」問題が生じつつあることを示しているといえる。更に、複数の老中の月番制によつて処理されていた旧來の幕府行政が、専任の行政スタッフによる強力な指導を必要とするものに、質量共に變化していることを左内が認識して來ていることをも示している。ちなみに、幕府はようやく慶応二・三年になつて、將軍慶喜のもとで、老中をそれぞれ陸軍總裁・海軍總裁・国内事務總裁・會計總裁・外国事務總裁の専任制とした。この措置は仏国公使ロッシェの建言に基づくものであるといわれている。⁽³⁰⁾第二に、「国内」問題が幕府の新しい統治領域として出現したことに対応して、従來親藩・譜代・旗本が独占してい

た幕府官職を開放して、新設されたこれら官職に外様雄藩大名・諸藩士・処士を挙用し、幕政をより広範な華国的基礎の上に置くこと。このことを左内が端的に「日本国中を一家と見候」と表現していることはよく知られている。勿論このことが直ちに幕府権力を国民大的に基礎づけることを意味するものでないことは、引用した左内の文章から明らかであろう。第三に、この様な改革を断行し、山積する内外の諸問題を処理する上で、將軍と補佐の關係に強力な指導を期待すること。「何卒、廟堂一大英主之現在し給ひて、此辺之事に御配慮御座候様願は敷奉存候」この文章は將軍継嗣問題（「建儲」）に関連して書かれたものであるが、一橋派としての左内のこの問題に対する積極的関与は一橋慶喜にこの様な強力な指導を期待したという理由による。第四に、西洋技術の導入と「乞児・雲介之類」（これらは遊民と考えられているのであるが）の徴用による荒撫地開拓・殖産事業の推進である。

右の様な国内改革を踏まえつつ、左内は積極的な開国論の立場に立って、対外交易・欧米文明の摂取を唱えるのである。例えば、外国交易を目的とする藩の殖産事業の推進、商館の設置を提言し、更に進めて、「外国民と引合候上は、品物之交易のみならず、智慧之交易肝要に御座候。即製作使用之器械、經濟実用之談論をも交易致し度奉存候」と述べ、更に「貿易引合之間に、逐々懇切之談に及び、舍密・測量・航海等、諸学科之事をも穿鑿仕度候」と説くのは、彼のこの立場の積極的な標榜である。象山の「東洋道德、西洋芸術」と共によく知られている、左内の「仁義之道、忠孝之教は吾より開き、器技之工、芸術之精は、彼より取り候」というテーゼは、彼の積極的開国論における対外態度を端的に表示するものである。

ところで、象山と左内のこの二つのテーゼは、共に所謂採長補短主義の立場を表明するものと理解されているが、両者の東洋と西洋との価値的関連づけには違いがある様に思われる。すなわち、象山のそれは、「東洋道德」|| 格物窮理の中に「西洋芸術」|| 西洋近代自然科学が包摂されるものと観念されていた——その意味では「東洋道

徳」の「西洋芸術」に対する価値的優位に何の疑いをも持たれていなかった——のに対して、左内のそれは両者の違いを鋭く意識し、そしてそれだけ一層「仁義之道、忠孝之教」の価値的優位がことさらに強調される様に思われる。逆に言えば、左内の採長補短主義は、西欧文明の全面的無条件的摂取に対する強い警戒心を伴うものであったといえる。

福井藩は安政四年に藩校明道館内に洋学習学所を設置したのであるが、左内はこのことに関連して、蘭学（洋学）教育について意見書を提出し、藩の布告書の草稿を書いている。そしてここに彼の蘭学（洋学）に対するもう一つの態度が表われている。例えば正規の蘭学修業生（「定員の生徒」）の資格を論じて彼は言う、「行々は教授より篤と人撰致し、学一經に通し候者に洋学一科づゝ為相学ニ候様仕度候。喻ば春秋内外伝に長し候者に兵科、周礼に長し候者に製械科・開物科、易に長し候者に究理科と申様に致候はゞ、御趣意の如く正しき学風に相成可申候」（傍点引用者）、「定員の生徒は随分人物御扱被成候而、性質宜しき者に被仰付度候間、（中略）其人心術等切に見とめ、其上にて定員に御加へ可被成候」と。

そもそも左内にあつては、学問とは「道之修行」である。曰く、「学問は道之修行に而、芸術而已修業にては無し義勿論に候」と。勿論この様な学問観は左内に特有のものではなく、本来儒学において中心的な学問観であることは云うを俟たない。ただこうした学問観の中に蘭学（洋学）を位置づける仕方において、左内は、先述した象山とも後に詳しく検討する横井小楠とも明確に一線を画する様である。左内は蘭学（洋学）を「芸術」と規定することによって、「道」との異質性を際立たせて、前者を後者に従属せしめ様とするのである。従つてこの場合、両者の異質性とは、特殊西欧近代の意味における、「道」の属する社会秩序と「芸術」の属する自然秩序との連続性が截断された処に生ずる両者の没価値的観点に立った異質性ではなくして、何よりもまず価値的観点に立った、東洋

の「道」と西洋の「芸術」との異質性である。左内にとって両者はかかる観点から峻別されなければならない。かくして蘭学（洋学）は一面では「尊王攘夷」のために止むを得ず摂取しなければならぬ必要悪と考えられている。曰く、「当今海警等頻御座候時節に候へば、尊王攘夷之策、先彼の所長を知り候事、第一たるべく候。彼の所長を知り候には、其学芸・技術を講究候事最も急務たるべく義に付、（中略）右等の御趣意能々相弁へ、切りに新奇費用を喜び、外国を誇稱して、皇国を卓視致し候様の所行無之様、心得為仕度奉存候事」と。

右に見た様に、左内の西洋文明摂取論にはある意味で受身の姿勢があるが、その反面としてまた、彼の「仁義之道、忠孝之教」には西洋文明を峻拒する——攻撃的とはいえないとしても——ある積極的な役割が与えられている。それは、「尊王攘夷」のためとはいえ「彼の所長」の摂取によって途を開かれた西洋文明の圧倒的な流入に抗して、自からの文化の固有性を防禦する——それは自己の文化的アイデンティーの確立・保持でもあるのだが——思想的あるいは精神的な拠点たるべきものであったといえる。左内が「皇国」と「異邦」との違いを、「神武皇之御孫謀御遺烈」としての「人忠義を重んじ、士武道を尚ひ候二ヶ条」に求めて、「此二ヶ条皇国之皇国タル所にして、支那之華靡浮大、西洋之固滞暗鈍ニ比し候得は雲泥之相違」と述べているのは、そのことより直截的な表現であったといえる。そしてこのことはなによりもまず、「異邦」との対比において「皇国之皇国たる所」が求められていること自体の中に端的に表われている。

こうして、開国と積極的な西洋文明の摂取を主張した左内には、それにもかかわらず——というよりは、まさにそれ故に——圧倒的な西洋文明（それは軍事力に象徴される強大な国力と、それを支える科学・技術として表われる）に抗して、開国政策の面では「攻撃性」が、精神的な面では、「固有性」の強調——それは一面では防禦的であるが、他面では攻撃的でもある（「仁義之道、忠孝之教は吾より開く」——が色濃くつきまとうことになる。

次にこうした「開国攘夷」論と対比しながら、横井小楠の開国論を検討しよう。

註

- (1) 竹越與三郎『新日本史』上(『明治文学全集77』) 一〇頁。
- (2) 福沢諭吉『福翁自伝』『福沢諭吉全集』(第二版) 一四七—一四八頁。ルビはママ。
- (3) 会沢正志斎『時務策』(『日本思想大系・水戸学』) 三六—一三六八頁。ルビはママ。
- (4) 久坂玄瑞書簡 文久元年四月八日付 入江杉蔵宛 妻木忠太編『久坂玄瑞遺文集』上 二六〇頁。
- (5) 久坂玄瑞書簡 文久元年六月二日付 入江杉蔵宛 同右 二八四頁。尚、久坂が松代を訪ねて、幽囚中の象山に面会したのは文久元年五月一日である(同右 年譜 二七頁)。
- (6) 『水戸藩史料』上編乾 一九—二〇頁。尚、「ぶらかす」の語義は不明。前田勇編『江戸語大辞典』に、「ぶら」の項に「ぶらりと垂れさがったさま。ぶらぶら。」とある。あるいは、この「ぶら」を動詞化して、決着をつけずに置くことを意味させるものであろうか。
- (7) 『日本思想大系・幕末政治論集』 一七七頁。
- (8) 竹越 前掲 一一頁。
- (9) 佐久間象山「ハルマを藩業にて開板せんことを感応公に答申す」(嘉永二年二月) 信濃教育会編『象山全集』巻二 上書 六一—六三頁。
- (10) 佐久間象山「時事を痛論したる幕府へ上書稿」(文久二年九月) 同右 上書 一八七頁。
- (11) 同右 一八四—一八七頁。
- 尚、象山のこの提言と夷狄観批判については、佐藤昌介(『洋学史の研究』 一四〇頁)が批判的に検討している。
- (12) 特に、宮本仲『佐久間象山』、丸山真男『幕末における視座の変革』(『展望』 一九六五年五月号)、植手通有『幕末にお

ける近代思想の胎動」・「幕末における対外観の転回」・「佐久間象山における儒学・武士精神・洋学」(以上いずれも、植手『日本近代思想の形成』に所収)、佐藤昌介『洋学史の研究』(特に、第一篇第三章)等。

右のうち佐藤は、象山の「大言壯語癖」・「自己顕示欲」・「誇大妄想的な性癖」を指摘して、具体的には、彼における西洋砲学と西洋自然科学知識の実態・朱子学と近代自然科学の方法における内的関連を詳細に検討した後、「象山が蘭語をまなび蘭学の研究に従事したといっても、その影響は精神の皮相にとどまり、内部にふかく浸透することがなかった。(中略)かれの蘭学は、正統派のそれとは異なり、幕末維新の激動期に狂い咲いた徒花にすぎない」(二四六頁)と、否定的な結論を下している。もし象山の思想がかかるものであるとすれば(そしてこの評価は一面で、ある真实性をもっていると思うのだが)、佐藤自身が認めている「幕末におけるすぐれた開明的思想家」(二三〇頁)としての象山の本領が果してどこにあったのが、佐藤自身によって改めて問題にされなければならないであろう。

(13) 佐久間象山「省儉録」 『象山全集』卷一 九頁。原漢文。

(14) 同右 八頁。

(15) 佐久間象山書簡 万延元年正月一五日付竹村金吾宛 『象山全集』卷五 書簡 一八三頁。

(16) 植手 前掲 三九―四六頁。

(17) 佐久間象山「時事を痛論したる幕府へ上書稿」(文久二年九月) 『象山全集』卷二 上書 一六五頁。

(18) 佐久間象山書簡 安政元年四月二七日付山寺源大夫外宛 『象山全集』卷四 書簡 一五四頁以下。

(19) 佐久間象山「ハルマを藩業にて開板せんことを感応公に答申す」(嘉永二年二月) 『象山全集』卷二 上書 六六頁。

(20) 佐久間象山「省儉録」 前掲 二二頁。

(21) 佐久間象山「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」(天保一三年二月) 『象山全集』卷二 三六頁。

(22) 佐久間象山「内閣により文聡公に呈したる意見書」(文久二年二月) 『象山全集』卷一 上書 二二九―三〇頁。

- (23) この語句は、諸橋徹次『大漢和辞典』には、「以夷制夷」あるいは、「以夷攻夷」とあり、王安石の「梅侍讀神道碑」の次の一節が引かれている、「公請擇人使番羅支兵法所謂以夷攻夷」。尚、管見によれば、『李衛公問對』上に、太宗の言葉として、「古人云、以蛮夷攻蛮夷中国之勢也」とある。ここに云うところの「古人」とは何人であるか未詳。
- (24) 佐久間象山書簡 嘉永六年六月二十九日付小寺常之助宛 『象山全集』巻四 書簡 一五七頁。
- (25) 佐久間象山『省儉録』 前掲 五頁。
- (26) 植手 前掲 四九頁以下、特に五四―五六頁、及び六一―六五頁。また、佐藤 前掲 二二五―二三六頁参照。
- (27) 佐久間象山「内問により文聡公に呈したる意見書」(文久二年二月) 『象山全集』巻一 上書 二二〇―二二二頁。
- (28) 山口宗之『橋本左内』 五一頁。
- (29) 橋本左内書簡 安政四年一月二八日付村田氏寿宛 景岳会編『橋本左内全集』上 五五二―五五六頁。
- (30) 渋沢栄一『徳川慶喜公伝』3 (平凡社・東洋文庫版) 三〇八頁。法制史学会編・石井良助校訂『徳川禁令考』前集第二 一四六―一四七頁。
- (31) 橋本左内書簡 安政四年一月二一日付村田氏寿宛 『橋本景岳全集』上 四七二頁。
- (32) 橋本左内「外国貿易説」(安政三・四年頃) 『橋本景岳全集』上 三四八―三四九頁。
- (33) 橋本左内書簡 安政四年一〇月二一日付村田氏寿宛 『橋本景岳全集』上 四七一―四七二頁。
- (34) 橋本左内「学問所事件に付布告原案」(安政四年四月二二日) 『橋本景岳全集』上 二四五頁。
- (35) 同右 二四七頁。
- (36) 同右 二四四―二四五頁。
- (37) 橋本左内書簡 安政三年四月二六日付中根雲江宛 『橋本景岳全集』上 一〇八頁。